

# 平成27年度第1回 環境放射能監視検討会

日 時：平成28年1月19日（火曜日）

午後1時から

場 所：エスポールみやぎ3階 大会議室

## 1. 開会

○司会 ただ今から、平成27年度第1回環境放射能監視検討会を開催いたします。

## 2. あいさつ

○司会 開会に当たりまして、佐野環境生活部長からごあいさつを申し上げます。

(佐野環境部長あいさつ)

○司会 それでは佐野部長に座長をお願いし、検討事項に入らせていただきます。

## 3. 検討事項

○座長 座長の佐野です。今回は検討事項が5つあり終了予定を午後3時30分と想定しております。長時間の会議になりますが、よろしく申し上げます。さっそく検討事項に入らせていただきます。検討事項イ「モニタリングステーションの再建」について説明願います。

### イ モニタリングステーション（MS）の再建について

(検討事項イにつき説明)

○座長 ただいまの説明につきまして、ご意見、ご質問がございましたらお願いします。

○岩崎（俊）委員 測定項目の中で、飯子浜と谷川では、降水量を観測しないようですが、何か特別な理由がございますか。湿性沈着が起こったかどうか判定をする際に非常に重要なデータとなるので可能ならば観測した方がよいと思います。ご説明をお願いいたします。

○事務局 ご質問ありがとうございます。

飯子浜につきましては、（降水量を観測している）小屋取局が非常に近いところにあるということと、谷川につきましても（再建により降水量の観測を計画している）鮫浦に非常に近い局があるということで、降水量につきましてはそんなに差がないだろうということで、この2局につきましては降水量を測定しない方向で考えております。

○岩崎（俊）委員 著しく費用がかさむなどの問題がなければ、測ったほうがよいと思います。

ご検討お願い致します。

○事務局 どうもありがとうございます。

○池田委員 モニタリングステーションの位置ですけれども、設置の理由というのをあわせて考えてみると、例えば半径10キロの中には鮎川とか渡波というのが含まれているわけですがけれども、これ必ずしも鮎川とか渡波で例えば異常値が検出されたときに、半径10キロ以内ではそう

いった値が検出されるだろうということを示しているわけではないですよ。その場合、同心円状に配置されているので、例えば鮎川というのが半径10キロ以内の値を代表するものだと考えてここに設置しているのか。何か意図を感じるのですけれども、本当にそういうことになるのかなど。

- 事務局 鮎川は代替モニタリングポストになります。新しく設置する場所は、飯子浜、鮫浦、萩浜そして谷川と考えております。
- 池田委員 設置される理由というのがいろいろあるわけですが、そういったことをバロメーターとして入れると、半径何キロ以内はこんな値で出ているだろうという予測も成り立つんですか。
- 事務局 モニタリングステーションは原子力発電所からの予期しない放射性物質の放出を検知するというのが目的です。モニタリングステーションで予測するというのではなく、あくまでもモニタリングステーションは実測の施設です。
- 池田委員 はい、わかりました。
- 山崎委員 現在ついている代替モニタリングステーションに関してですけれども、これはこの4局が再建された段階で廃止ということでしょうか。
- 事務局 はい。代替の可搬型モニタリングポイントにつきましては、津波で失われた4局の代替として設置をしたものでございますので、我々の考えとしてはステーションの再建と合わせてのタイミングで廃止、測定は終了したいと考えております。
- 事務局 すみません、若干補足させていただきたいと思います。原子力安全対策課でございます。

代替のモニタリングポストにつきましては、こちらはもともと設置されていた集落が壊滅的な被害を受けましたので、仮設住宅等々に近いところでモニタリングをするということから暫定的なモニタリングとなっております。この方々がもとの集落に戻るとのこと、そしてやはり発電所の近隣のところで予期せぬ放出を感度よくモニタリングをするということ、また発電所の周囲の方角ということも勘案いたしまして、従前あった集落のところに再建をしたいということが県の考え方でございます。そういった意味でいろいろご助言をいただきたいなと本日思っております。

- 山崎委員 例えば渡波ですとか鮎川というのは、もともと人口の多いところではないかと思えます。そういう意味では、住んでいる人間に対する影響ということでは、意味もあるのかなと思います。もちろんトータルとしてお金の問題とかいろいろあるかと思うんですけれども、発

電所からの直接の影響がすぐに及ぶという点ではやはり近場でいい場所であるということは重要ですが、住んでいる人間に対する影響という意味では例えば渡波、鮎川にも意味があるのかなとちょっと疑問でしたのでお聞きしたのです。

それから、もし廃止にする場合ですが、ぜひご検討いただきたいのは、例えば1カ月、2カ月でもいいですけれども、両方が重複した期間を残しておくべきだと思います。ぶつっとある日で完全に入れかえてしまうという、やはりデータの連続性などが見にくくなりますので、重複した期間をぜひご検討いただければと思います。

○岩崎（智）委員 従来の考え方に沿って新しくいろいろ県の中で検討されたんですけども、ここで私として質問したいのは、福島を踏まえて特に半島の先、あるいは根っこを含めて避難ということを考えたときに、今度設置するモニタリングステーションがどういうふうに関立って、それと長期的にどちらの方向に滞在、逃げた上でどこにいた方がいいのかという、そういういわゆる避難した先のさらにその次のステップで役に立つモニタリング等を考えておかないと今回はいけないと思うんです。従来のように発電所からどのくらい出たかを評価するためのモニタリングステーションという役割から、出た後に地面についてしまったものがどのくらいあるか、あるいは空中に飛散しているのがどのくらいあるかということの評価できて、県あるいは国のほうでそれを有効に使えるようなものでないと、せっかくつくりますから、いけない。次の議題でもありますけれども、どういう遮へい、どういう測定をするかというものにかかわってくるんですけども、その辺の避難、あるいはそれから先のことについてどういうふうに今回の設定との関係について検討されたのかご説明いただきたいんですが。

○事務局 今の先生のご質問に対しまして、ちょっと別な観点から実は施策を進めてございます。今回、委員の先生方にご相談をさせていただきましたのは、従前の考え方に基づいてモニタリングステーションを再建していく場合にこういうような考え方になりますと。県としては、女川原子力発電所を監視するステーションとしては、本日ご提案させていただいたこと、地元の方々ともご相談をさせていただきましたけれども、同様の再建でいいのではないかとということで、あとこれにつけ加えるご助言等ありましたらという意味でご相談をさせていただきました。それから、もし原子力発電所で事故があった際に、影響評価、それからどのような方向に逃げるのか、放射性物質がどのような飛散状況になっているのかというのを県としてきちんと把握しておく必要があるんじゃないかと。それをこれで検討したらどうだというような御提案だと考えましたけれども、それにつきましては、現在県では30キロ圏内をほぼ5キロメッシュで切りまして、その5キロに1つずつ簡易線量計を設置する計画を今進めてございます。原

子力発電所を中心に30キロ圏内で陸地の部分を5キロメッシュで切りますと、大体50カ所弱ぐらいのメッシュになります。それで、そのメッシュの人口の多いところに簡易型のモニタリング計といいますか線量計を設置いたしまして、有事の際には県庁側からのボタン1つで、または監視センター側からのボタン1つで無人で測定をしてデータを全て監視センター側で集計をしたり、そのモニタリングの状況、放出の状況を監視できるようなシステムをこれから組もうとしております。今年度は、そのうちの約半分、25ポイントに設置いたしまして、来年度にその残りの部分を設置すべく今進めておりますので、防災計画ということ、もしくは避難、住民の安全という部分では、そういったことで実測のシステムを別途整備させていただいておりますので、こちらのほうとは多少切り離れたほうがいいのかというように考えております。もちろん活用させていただきたいとは思っておりますが、以上です。

○岩崎（智）委員 続きで。多分いろいろなしがらみがあって、監視は監視、防災は防災というような人から組織から全部そのような縦割りになっているんだと思うんです。だけれども、ところが避難するかどうかというデータ、例えば50カ所に建てるかどうかというデータは、あくまでも今回のこのモニタリングステーションがベースなので、これとそちらをカップルさせた考え方をとっておかないと、まるっきり独立ではない、あくまでもこっちは最初にスタートするわけですね。ここで設置したから50カ所建てましょうということになるので、その関連も、組織も人もうまいことリンクするようにしておかないと、福島のように逃げた方向へ風が追いかけてくるというようなことがあってはならないので、そうならないことをやるように、しっかりとまたお願いしたいということで、要望だけさせていただきます。

○長谷川委員 この点に関して、例えば福島ですと、（無線モニタリングステーションが）県内77カ所にわたって設置（そのときに入札でちょっと問題あったのですが）され、運営は規制庁から県に委託されています。私の理解では、そういう防災に絡む放射線線量率は規制庁が全部統一して扱うことになっていると思います。以前ですと、有名なSPEEDI（緊急時迅速放射能影響予測ネットワークシステム）を使ってどうのこうのと言われていました。SPEEDIは、（福島第一原発事故のように原子炉からの放射性物質の放出情報（ERSS：緊急時対策支援システム）などが得られない限り）使い物にならないというのが現時点での規制庁の意見なんですね。そのためモニタリングステーションを多数設置し、放射線線量率の実測によって判断するということになっていると思います。もしおわかりでしたら、規制庁の方に、概略でもよろしいから、現状はこういうことなんだと説明いただけないかと存じます。ここでは県のモニタリングポストの話がされているわけですが、現時点ではそれはそれだけじゃ

確かにしょうがないわけで、岩崎先生おっしゃるとおりだと思うんです。ただ岩崎先生が言われるように、（規制庁、県の）それらが密接に協力し合わないと、何か机上のペーパープランではちゃんとやることになっていても実際には動かなかったということはよくあることなので、県としても注視していただきたいと思います。（規制庁さんから）少し何か説明いただければありがたいと思います。

○原子力規制庁 簡易式の電子線量計を配備することに関してですか。

○長谷川委員 はい。

○原子力規制庁 昨年度から全国の主に原子炉を中心に緊急時交付金、これは実質は内閣府が持っていて、防災のほうで、緊急時交付金のほうで全国に、先ほど事務局のほうからもお話しありましたように、おおむね5キロのメッシュで、防災としましては各市町の最少の防護単位を決めて、そこに最低1カ所は設置していただくということで予算を獲得して動いております。宮城県さんに関しましては、設置点の選定区間も非常に困難だったとは思われますが、一応50カ所を目処に今年度と来年度で完備しようとしています。その大きな目的としましては、まず防災に関して言わせていただければ、O I Lの考え方で、5キロ圏内の方々は今ある3台、それから今後設置する4台、可搬型も含めまして、その5キロ圏内の部分に関しては、その測定値以下にかかわらず、全面緊急事態になりましたら、全員退避、避難ということで、放射能の放出がある前にすぐ防災の意味では全員いなくなるという前提でおります。5キロから30キロに関しましては、電子線量計を用いまして、O I L 1・2の判断を実測でしていこうということで配備を進めておりますので、この今議題になっておりますのは5キロ圏内に固定局を置こうと。流された分に対して要するに今まで可搬型を置いていた部分を固定局に変えようという、そういう意味合いですので、電子線量計の配備、O I Lの判断で避難をさせていこうという問題と、この今県が議題に上げている5キロ圏内に配備をしていこうという問題とは少し論点は違うのかなと思います。要するに、5キロ圏内をどういうふうにしちとして測定していくかという意味合いで捉えていただければと思っております。電子線量計の5キロメッシュに関しましては、かなり人口とか地形によっていろいろ配備点は違うとは思いますが、一つは長谷川委員もおっしゃられたように、規制庁としては実測に基づいて防護をしていこうと。予測で住民避難は今のところはさせないという意味合いでやっしていこうとしています。それで、S P E E D Iのことが使えないというようなことで言われておるんですが、これは1つ補足させていただきたいのは、規制委員会、規制庁自体がS P E E D Iを悪者に行っているわけではない。拡散予測という言葉は指針からも削られましたが、今後の例えば被曝評価とか、あ

るいは避難計画とか、そういうことに関しては使っていてもいいのではないかというようなことで、SPEED I そのものを完全に否定しているわけでは、ただSPEED I の運用は規制庁としては今年度末で一応運用は終わります。ただ、拡散予測というものが必要であれば、JAEAや原子力安全技術センター等へ委託して、必要なときには使える、そういうコードとかソフトは持っているというようなことで運用をしていくという意味合いで捉えていただければ。SPEED I をなくすとかという、ソフト自体は残っていますので、ただはっきりと言えるのは、住民防護、住民避難に対してだけは使わない。実測でやるという、そのところだけご認識いただければと思います。説明になったかどうかはわからないんですけども。以上です。

○長谷川委員 県と規制庁と地方とで密接に連絡を取り合って県民を守るという姿勢が大事ですから、そこをよろしくお願ひしたいと思います。

それから、SPEED I も、何か弁解されたようですが、技術者から見ますと、予算は減らすとか、防災には使わない（マスコミ情報）となったら、もうその技術は発展しないんですよ。要するに、技術というのは（日頃から）必ず水をやって肥料をやって、常日ごろから育んでいかないと使い物にならないんですよ。予算を削る、使い物にならないなどとマスコミに伝えられては、やはりいざというときに使いものにならない。それは技術を知らない人間の言うことであって、私はその点を強調しておきたいと思います。田中さん（原子力規制委員会委員長）にも言うておいてください。

（長谷川委員追記：2013年の南相馬の米汚染に関し、規制庁はSPEED I を使った解析から、その原因は福島1Fの3号機のがれき飛散が原因でないとしたとマスコミ報道されています。規制庁は、一方でSPEED I は使いものにならないと言い（マスコミ報道）、他方では3号機のがれき処理による放射性物質の飛散に関してはSPEED I を使っているように見えます。このことは、SPEED I の信頼性、有用性などに関し、福島県や宮城県の県民の一部に困惑を与えているように思います。規制庁の丁寧な説明が必要かと思ひます。）

○座長 ありがとうございます。ほかにご質問、ご意見ございますでしょうか。

○池田委員 あと、震災前には女川町の役場の中にモニタリングの値をリアルタイムで示すようなパネルがあったんだと思うんですけども、今後はそういったものの設置というのはお考えになられているんですか。

○事務局 副監視盤の設置につきましては、既にUPZ圏内の役場とか石巻市役所については設

置しております。女川町につきましても予定はありますけれども、役場の庁舎がまだ仮庁舎ということでございまして、本庁舎になりましたら設置する予定になっています。

- 池田委員 例えば、その各近い集落のところにはそういったものは設置されないんですか。
- 事務局 その局に行けば値は表示しておりますけれども、集落ごとにパネル、表示するようなものというのはございません。ただこの値につきましては、県のホームページにリアルタイムで公開しておりますので、インターネット環境をお持ちの方に限定されてしまうんですけども、常時値は確認いただけます。
- 岩崎（智）委員 ちょっと技術的なことでお聞きしたんですけれども、空間ガンマ線量率等は従来のものと同じ装備というか測定器を使う予定で考えてよろしいですか。
- 事務局 はい。
- 岩崎（智）委員 それと、そのときのいわゆる伝送部分と伝送部分のテレメータの部分。あと問題になるのは停電電源ですね。停電電源の場合は、その辺はどうお考えになっていますか。
- 事務局 非常用発電機につきましては、こちらは従来の局にもありますし、UPZ圏内のモニタリングステーションにも非常用発電機はつけております。今後再建されるモニタリングステーションにつきましても、非常用発電機は設置する予定でございます。
- 岩崎（智）委員 そうすると、大体テレメータは今と同じ設備。特別に新しくするとか、通信を早くするとかそういうようなことは何か考えていらっしゃいますか。
- 事務局 今のシステムに組み込む形ということで考えております。
- 岩崎（智）委員 まあ、テレメータは。1つ質問ですが、建てる場所が津波の跡地ではなくて高台に多分建つとすると、風向とか風速とかというのが実際に住んでいる場所と、いわゆる海岸沿いと、住んでいる場所というのはちょっと変ですね、その辺の関係というのはどういうふうに考えていらっしゃいますか。今度建てる時の設定やこれから、来年ということですけども、海岸沿いに建てるほうがいいのか、高台というか住んでいる近くに建てるほうがいいのか、その辺のいわゆる立地条件的にはどういうものをお考えですか。
- 事務局 基本的には、高台。結局今回は津波で被災したものですから、やっぱり津波の被害の影響の極力少ないところと考えています。
- 岩崎（智）委員 いや、だから津波の被害が少ないところがいいのか、監視上どこがいいのかということはどうお考えになりますかという意味です。
- 事務局 津波の被害が極力少ないところで、なおかつその中でも監視の条件が適したところということを条件として選定したいというふうに考えております。

○岩崎（智）委員 わかりました。位置的にも、場所的にも、内容的にも、問題は、従来どおりの測定が可能であるというふうに私も考えますけれども、単に津波が来ない遠くの山の高台に建ててしまったと。そうしたら、山風が吹いていて全然風向が違ったと。全然バックグラウンドも違ったというようなことのないようにしっかりと場所の選定は、多分市町の方とかち合ったりするものですが、やっぱりあくまでも監視上いい場所というのはしっかり考えて県のほうで対応いただけないかなと思っています。以上です。

○事務局 どうもありがとうございます。

○事務局 今の岩崎委員からのご要望も含めまして、もう少し、今回は根本的なコンセプトといえますか考え方をお示しさせていただいて、こういうようなスケジュール感でモニタリングステーションを再建していきますという情報を委員の皆様方と共有するとともに、そういうスケジュールで進めていきたいということを今日はお示しさせていただきました。具体的に場所が選定されてきましたら、改めてご報告をさせていただいて、ここでやるんだったらこういうことを考えなくちゃいけないよとか、そういうような具体的なご助言をいただきたいと考えておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

○座長 それでは、よろしいでしょうか。

〔なし〕

○座長 今日は多くのご意見、ご指導をいただきましたので、モニタリングステーションの再建につきましては、本日いただきましたご提言等を踏まえまして検討を進めさせていただきたいと思っております。

ロ モニタリングステーションにおけるNaI検出器の鉛遮へいについて

○座長 次に、検討事項のロ、モニタリングステーションにおけるNaI検出器の鉛遮へいについて説明をお願いします。

（検討事項ロにつき説明）

○座長 ただいまの説明につきましてご意見、ご質問等がございましたらお願いをいたします。

○岩崎（智）委員 2π下方向に遮へい体をつけるというのは女川特有で、多分先人が上方向、発電所から出て上から降ってくるものをしっかり見ようということで、地面からのものは遮へいして測りましょうという先人の知恵で設置時からついているんですけれども、福島を事故を経ると、降ったものはやがて落ちて地べたについたものを今度2π遮へいでそれを削って

測定しまうので、人間に対するデータとしておかしい、いびつなデータになってしまうということが、福島を考えるとどうしてもこの2π遮へいでは出てくるということで。私も福島以後を考えてみると先人の知恵としては非常によかったんだけど、福島後としてはないほうがいいかなというような気持ちで実はおりましたので、この検討をしっかりとされて十分耐えられるデータをとれるということがわかれば、その線で検討されたらいいかなと思っております。

○長谷川委員 岩崎先生と同じ意見なんですが、ここに資料1の1ページ目にあるように、このモニタリングステーションの目的に、周辺住民の外部被曝線量評価とあります。もう一つは、施設における異常の早期発見と原因の調査、要するに原発で何が起こったのかいち早くみずからのデータで検出しようということです。最近となりますと、原発のいろんなデータもオンラインでもう県に来ているわけですね。そうしますと、その意味の（モニタリングステーション）データ取得の目的は重要度が減っているんじゃないかと思しますので、今はやはり周辺住民の外部被曝線量の評価、それらをまた周辺県のデータとも比較すること主目的にしたほうがよろしいんじゃないかと私は思います。

○座長 ありがとうございます。ほかにございませんでしょうか。よろしいでしょうか。

〔なし〕

○座長 それでは、モニタリングステーションにおけるNaI検出器の鉛遮へいにつきましては、ただいまいただきましたご助言等を踏まえて進めさせていただきたいと思います。

#### ハ 東京電力株式会社福島第一原発事故による本県の環境放射能・放射線に対する影響評価について

○座長 次の検討事項に入らせていただきます。ハ、福島第一原発事故による本県の環境放射能・放射線に対する影響評価について説明をお願いします。

〔検討事項ハにつき説明〕

○座長 内容が多岐にわたっておりますけれども、ただいまの説明につきましてご意見、ご質問等がございましたらお願いをいたします。

○岩崎（智）委員 どうもありがとうございました。20ページのところで、ちょっとお尋ねしたいんですけども、ちょっとこれよくわからなかったのですが、青がセシウム以外の放射線の部分ということで、赤がセシウムということで理解していいですよ。そうすると、例えばbの小積のところはセシウムの分がそれ以外よりかなり多いという土壌で、それ以外のところ、石巻の電子線量計の移転地というところという赤はうんと小さいですよ。これは何が違って

セシウムの寄与量が違ってきているんですか。

○事務局 これはモニタリングカー定点地点のデータになるんですけども、牡鹿半島は結構いろいろ変化に富んだ地形になっておりまして、道路のそばで測っているんですけども、少し斜面になっておりまして、ちょっと木も生えておりますので、そういったところで蓄積したセシウムの寄与がかなり大きいんじゃないかというふうに考えております。

○岩崎（智）委員 植物成分、植物の葉っぱについているような成分の影響であり、岩とかそういうもともと持っている岩の種類が違うとかそういう話ではないと。

○事務局 測定地点の脇は斜面、木の生えた林みたいになっておりまして、その土に主に蓄積しているんだと思います。

○岩崎（智）委員 これ、小積のところを見ると、減ってきてはいるけれども、赤が非常に多く残っていますよね、まだ。このセシウムはどこ起因ですか。核実験起因ですか。

○事務局 これは、福島事故前はスペクトルを見ますと、実測値は全て自然核種ばかりでしたので、これは明らかに福島事故起因です。

○岩崎（智）委員 福島で、たまたまそこに多めに落ちたと。そういう理解でよろしいですか。

○事務局 はい、そうです。そういった影響を強く受けていると。あと、こちらの線量計設置予定地点は、どちらかというところ公共施設が多いものですから、アスファルトの上とか、砂利の上とか、こういった敷地ですので、しかも平地ですので、そういった影響はあまりないということとなっております。

○岩崎（智）委員 それで、そうして見ると、海水中の半減期は、水自体は1年ぐらいの半減期で拡散していて、セシウムが、地底土だと10年ぐらいの感じ。海底土だと10年ぐらいだというふうに理解したんですけども。

例えば48ページを見ると、1年、これは水だよ。次の49ページを見ると、10年、これは、地面、海底土だよ。そういう理解で、ざっとね。

○事務局 これは、福島事故前は大体半減期が10年から20年程度で、過去海水中濃度に影響を受けて海底土とか海産物とか……

○岩崎（智）委員 いや、そうなんだけれども。そうすると、海の中というのはすごい拡散が強く、30年の半減期が1年で、減っている。海底土は3分の1ぐらい。10年で放射能の減衰が見られると。だから、ウェザリングというふうに言ったけれども、要するに天然の成分で減衰がすごく海の中は強いというふうに理解してよろしいのですか。

○事務局 海底土の場合は陸とまたちょっと違うと思うんですけども、海水ともまたちょっと

違うと思うんですけども、今回海水と海底土を比較しないでいただけども、一応相互作用があるみたいなんです。何かプランクトンの死骸とかそういったものと一緒に海水中のセシウムが沈降してきて堆積物になったりという。かといってそれらはずっとじっとはしていないで…

○岩崎（智）委員 それ30年になっていない話だけれども、海底土も。ということは、どこかで消えているんですよね。

○事務局 ええ、そうだと思います。ただ、なかなか詳しく説明するのは難しいです。

○岩崎（智）委員 いや、それでね、この特にこれは見かけ1年なんだよね。だから、海というのはすごく拡散係数を大きくしてあっという間に減っちゃうんだなという。そして、大気中はなかなか減らないよね。大気が減らない割に海というのはやっぱりかなり強力な拡散、当たり前と言っては当たり前なんだけれども、初めて実感しましたね、セシウムについて。

だけれども、そのほかトリチウムはほとんど影響ないし、やっぱりセシウムの影響は宮城県にはやっぱり場所的にかなりあるところとないところがあるという理解でいって、大体10年ぐらいで減ってきている、陸上だと。10年まではいかないか。

○事務局 土に関しては、半減期という点で見えていなかったんですけども。たしか以前に福島  
の事故前に見たところでは、たしか物理学的な半減期より若干早目に減ってきたかと思います。

○岩崎（智）委員 20年ぐらい。10年までは行かない。

○事務局 10年までは行かないと思います。そういった土の質によりますけれども、セシウムはほぼ土の粒子に固着されてしまいますので。ストロンチウムだったら若干流れやすいですが。

○岩崎（智）委員 で、一番の心配は、今問題になっている森林の中でのセシウムの半減期というのは、どのぐらいになりそうですか。30年ですか。

除染したほうがいいかどうかというのが話題になっていて、ちょっと今単なる興味で聞いているんだけど、森林の中のセシウムの半減期は普通の平らなところと大分違うというふうに私は理解しているんですけども、どうですか。

○事務局 またちょっと土とはメカニズムが違うと言われているんですけども、森林の場合は葉っぱ、樹木も汚染をしているんです。それで、森林の土の上のいろいろな腐葉土というようなものもあって、それは完全に土化しないで、また木に吸収されて葉っぱになって落ちてきたりと循環するという感じですので、なかなか減りにくいと思います。そういうふうに言われております。

○岩崎（智）委員 物理的半減期でほとんど低下するしかないというふうに理解でよろしいです

か。

○事務局 それに近いんじゃないかなと思います。そういった森林についてもいろいろ研究されていますので、そういった報告を探せばもう少し確かなことを言えるかなと。

○岩崎（智）委員 いや、今日の発表で私なりに考えるのは、要するに水の中はかなり減ってきて、非常に早く減ると。海底土も10年ぐらいで減ると。陸土も10年とか、30年よりも圧倒的に速く減ると。ただ、ここの中に、日本中で問題になっている森林をどうするかというデータが今日聞けなかったのが残念だなと思うので、その辺についてこれから宮城県としてどう考えるか、国としてどう考えるかの前に宮城県、我々はどう森林を考えるかということ、いろいろ落ちているところがありますので、それについてちょっと第二バージョンをお聞きしたいと思ったのが私の目的なわけで。以上です。

○事務局 女川原発の周辺であっても、森林はもちろんありますので、そういった影響調査ということも大切なことかと思えます。

○岩崎（智）委員 どれくらい減っていくかというのを知らないといけないんじゃないかなと。

○事務局 わかりました。ありがとうございます。

○真野委員 非常に詳しい分析をしていただきましてどうもありがとうございました。それで、52ページにまとめが書いてあって、「把握した」とか、「評価できた」とか、「解析した」とかという結論なんですけれども、この分析が実際に例えば測定技術会みたいなところでどういうことに役に立つのかというところが、そこら辺のところをちょっとお伺いできればと思ったんですけれども、多分福島の原子力発電所から一番近いサイトが女川原子力発電所で、データがかなりたくさんあって、福島原発の事故後の現象解明に非常に役に立つというのが一つ大きな位置づけになるのかなと思うんですけれども、そのほかにやはりここで一番考えないといけないのは、測定をこれからもずっとやっていくことになると思うんですけれども、その中で今回の分析がどういうふうに生きてくるのか、どういう方向を目指しているのかと、そこら辺の話を伺えればと思いますけれども、いかがでしょうか。

○事務局 今まで福島の事故後、技術会・協議会で福島の事故の影響のある放射能なり放射線のデータをお示ししているわけなんですけれども、なかなか言葉とか数値だけで言われても福島事故の影響がわかりにくいというお声もありましたので、こういった機会に我々も、もう少し視覚化するといいますか、そういったことにウエイトを置いてグラフをつくってみたり、バックグラウンド値を差し引いてみたりということを試みたわけでございますので、もしも今後技術会や協議会の資料に反映できるものがあれば、反映していきたいと考えます。

- 真野委員 例えばセシウムの半減期が割ときちっと出てきましたので、今後福島の影響が測定結果にどういうふうに反映されるかといったようなある程度の予測みたいなものもできるのかなと思うんですけども、その辺はいかがですか。
- 事務局 なかなか我々が直接測れているデータというのは、放射線については固定モニタリングステーションでリアルタイムでどんどんデータをとれるからいいんですけども、環境試料の放射能の濃度の推移とか分布ですとか、こういったものはかなり労力を伴うものですから、なかなか手を広げにくいんですけども、もう少しいろいろ影響、変動、様子を見ていくように心がけたいと思います。
- 岩崎（智）委員 先生のおっしゃるのは非常によくわかって、県の報告書をこれから出されるときに、このデータを見るとセシウム、まとめの1番にあるように、福島第一事故による宮城県内の汚染のルートやその程度及び経年的変動状況を把握したと。宮城県内を把握したというふうに宣言されたわけですから、これから出てくる報告書は全てデータが高くなったら福島由来であるというようなことは言わないでしょうねと私は理解していて、先ほど言ったように、半減期は地べたは10年くらいですねと、森林はどのくらいですねというようなことを押さえられたということで私は理解していますので、そのように考えておりますということで、把握されたというふうに理解しました。
- 岩崎（俊）委員 47ページ、48ページのデータを、非常に興味深く見させていただきました。B1地点とB3地点で相当違うということですが、メッシュ切っているところ測定した結果、一番高いポイントだったということでしょうか。
- 事務局 こちらは国の調査結果ですので、ちょっと私も具体的にどういう考え方でやったかというのは確かめないと。もとの報告書、読んでみないと確かなことはわからないんですけども。
- 岩崎（俊）委員 地理的に分布が偏っているということであれば、どこが高くてどこが低かったか、その原因が何であったか理解できればより一層安心できると思います。特に気になったのは、阿武隈川の影響です。福島から放射性物質が流れてくる可能性があると思いますが、その影響はこれらの資料の中にはあらわれているでしょうか。
- 事務局 これは女川原発の周辺のところだけに限ってデータをお見せしているものですから、こういうふうに4地点なんですけれども、もう少し南のほうもやっておりますし、当然ながら福島原発の前ですとか周辺、かなり広い範囲でやっております。
- 岩崎（俊）委員 せっかくB1、B3地点で異なることが示されているのであれば、理由につ

いても検討していただければ、理解が深まると思います。

○事務局 B3はなぜ高いかというのは、実は調査した海生研のほうでもよくわからないんだと思います。海底土の場合だと、何か有機質ものが蓄積するような地形とか、海底の地形とかそういうところがありますと、セシウムが少したまりやすいと。これはこの場所に限らなくても、日本海側とかそういうところでもこういったこともございますので。

○山崎委員 先ほども出てきましたが、線量率で小積のように非常に福島の影響を強く受けているところがあるというのははっきりしてきたと思うんですが、先ほどの最初の議題で出てきたような今後モニタリングステーションを再建していくというような場合には、福島の影響が強い場所というのはやっぱり避けるべきなんじゃないかなと思います。ちょっと考え方としてなんですけれども。

○事務局 できればそのほうがいいのかもしいですけども、ただ実際にモニタリングステーションを再建するとなると、災害復興住宅の建設される場所の付近とか、この辺しかも津波の来そうのない安全な場所というのはなかなか土地の確保が難しいようなんですね。ですから、なるべくならそういう福島の影響が少ないところが望ましいですけども、別なそういう理由で、必ずしもそういう場所を選べないかもしれません。

○山崎委員 少なくとも非常に特殊な場所ではないということを設置してしまう前に下調べすべきじゃないかなということを感じました。

○事務局 最低限の建設予定場所のバックグラウンド調査を今後行いたいと思いますけれども、ただ、言いましたように、用地については非常に限られているものですから、なかなか、そういう線量が高いから避けたいとか、その条件では必ずしも選べないかもしれません。

○長谷川委員 今の質問に関連して、モニタリングステーションの目的は何だということが大事だと思うんです。小積というのは牡鹿半島の南側の代表点でもあるんです。だから、福島原発からの（粉じんなどの）影響がより出てくる可能性が高いわけですね（尾根を超えていないから）。そういう高いところはやめておけというのもまたちょっとと思います。要するに住民の安心感というのを考えることが重要なので、きちんとした考えに従ってやるべきだろうと思います。

それから、今いろいろ規制庁のデータであったのは、福島県はいろいろたくさん20キロ、30キロといろんなところを測っているわけですね。それはホームページで公開されているんですよ。それをどう整理していくかというのは、これからだと思うんですが。まだ規制庁さんでは結論みたいなことは言っておられないですよ。サマリーはなしで、単にデータを示してお

られているだけですよ、今は。

○原子力規制庁 環境のセシウム分布ですか。

○長谷川委員 はい。半減期が幾らだろうとかそういうのは一切ないですよ。

○原子力規制庁 環境の半減期に関してはまだ結論は出しておりません。森林に関しても、環境省として今やっている最中です。

○長谷川委員 我々とすればそれをウォッチしていくべきじゃないかと思います。県（の測定）に関する情報はやはり県内でデータを整理していくのがいいんじゃないかなと思っています。

○事務局 山崎先生、ちょっと補足させていただきますと、小積でちょっと高いというふうな印象を与えてしまったんですけれども、これはあくまでモニタリングカーの測定ポイントの1個であって、小積全部が高いというわけではありませんし、モニタリングステーションを建てるのは、小積じゃなくてむしろその隣の集落の荻浜というところに計画しています。

○山崎委員 16ページのほうの、これは代替ステーションでしたかね、可搬型。こっちもやっぱり非常に高かったですかね。

○事務局 これも同じところですよ。

○山崎委員 同じところですか。同じデータですか。

○事務局 ええ。これは、技術会・協議会に報告しているのは線量のデータだけですので、過去の値を差し引くことによってセシウム値を評価したということですが、先ほどのスペクトル解析は個別に求めることができるということでここで整理しました。

○梅田委員 既に質疑が出ていましたが、一番最後のまとめに書かれています海底土と海産生物中のセシウムが、過去の核実験よりも早く減少ということに関して、うまく理解していないだけかもしれないですが、これは過去の核実験のときに同じように測った海底土や海産物中と比較して、今回のほうが早かったということですか。

○事務局 福島の事故の後に測った海底土中のセシウム濃度の減衰は福島事故前の核実験起因のセシウムの変動よりは早く減ったという意味でこういうふうにお示しをしました。

○岩崎（智）委員 昔はソースが長年ずっと長いため、半減期がなまってしまふ。福島の場合は一時だから。

○梅田委員 ソースの問題ですね。測定場所や測定頻度などが効いているわけではなくて。

○岩崎（智）委員 年単位で降りてくるソースと一発のソース。

○事務局 昔の核実験で生成した全セシウムの量は100ペタベクレル、100×10の15乗ベクレルと言われているんですよ。それに対して、今回福島事故で放出されたセシウム137は

8.8 ペタベクレル。桁的にかなり少ない。要は、量的な問題の違いだと思うんです。

○長谷川委員 量とパーティクル（飛散微粒子）のサイズの違いですね、残っているのは。

○座長 よろしいでしょうか。

〔なし〕

○座長 今回のこのデータにつきましては、福島原発事故の影響について県内の測定結果やそれから国、近隣県の公表データに基づいてまとめたものでございます。先ほどの岩崎委員からも把握したということでもいいのかというお話はいただいたんですけども、県として全部まとめたものを解明とか、分析とか、そういうものは県として全部できるのかというと、決してそういうふうに、我々としてそういう技術があるわけではございませんので、その辺はむしろ先生方に今日いただいたようないろいろなご助言をいただきながら、このまとめたデータをどのように公表していったらいいのかということについて、さらなるご指導、ご助言をいただければとこういうことでございます。もちろん全体的な話については、しっかり国のほうで分析をしていただきたいというふうに考えてございます。

## ニ U P Z 圏内における平常値の把握を目的とした調査について

○座長 続きまして、検討事項ニ、U P Z 圏内における平常値の把握を目的とした調査について説明をお願いします。

〔検討事項ニにつき説明〕

○座長 ただいまの説明につきまして、ご意見、ご質問がありましたらお願いいたします。

○尾定委員 いろいろ計画はわかったんですけども、2番目の測定項目及び測定地点のことについて、環境放射能のサンプルの農林畜水産物とか、陸土とか、一応町村から調整が済んで28年度開始するというのがありますけれども、まだ未定というのがあるんですけども、それは実施する予定はあるとは思うんですけども、どういうタイミングで実施をされるんでしょうか。やっぱり各町村でまだそろっていない何かがあるんですか。まだ整備中でサンプルをとるようなそういう場所がまだ確保できないとか、何かだからそういう事情とかいろいろあると思うんですけども、どういうタイミングでとられますか。

○事務局 それは、女川町さんや石巻市さんは特に今回の東日本大震災で被災しているということもありまして、まずそちらのほうの落ち着くというのを優先しているということもありまして、そういうのが落ち着いたところでそういう場所を紹介していただいて調整していきたいと

考えております。

○尾定委員 わかりました。じゃ一応未定なんだけれども、条件が整ってきていることをちゃんと話し合いできるような状態になったら実施するということですね。はい、わかりました。どうもありがとうございます。

○座長 ほかにございませんでしょうか。

○梅田委員 最初のほうの議論で岩崎先生からもありましたが、別紙2で50カ所のうち25カ所が示されています。あとの残りの25カ所はどういう配置になるのかをざっとお教えいただければと思います。

○事務局 こちらまだ具体的には決まっていないうですけれども、例えば都市部とかはもう少し密に設置したほうが良いということになっていまして、石巻市のこの図でいうと16番などで、その辺はもう少し増やすとか、ちょっと間があいている場所も、住人は少ないんですけれども、設置したほうが良いでしょうということにされていまして、そのようなところに設置していくということになっています。

○梅田委員 わかりました。5キロメッシュというお話が最初ありましたが、それにとらわれず、石巻のあたりはもうちょっと密にするなどの割り振りも検討されているのですね。

○事務局 5キロメッシュというのは、あくまでも目安でありまして、その場所の状況に応じては密になるし、もっと薄くもなるということです。

○梅田委員 わかりました。こういった新しい地点の配置図についても、またお見せいただければいいかなと思いました。よろしくお願ひします。

○岩崎（俊）委員 UPZ圏内に対する避難体制は分かりました。しかし、福島原発事故で30キロ以遠の宮城県の稲わらが汚染され、流通したというケースがありました。そのようなことが起こらないような対策は、この中には含まれていないのでしょうか。

○事務局 今回説明させていただいたのは、30キロ（UPZ）圏内に関しては普段のバックグラウンド把握に努める必要があるということで、それに基づいて機器やモニタリング地点を設置しますということになります。

○事務局 すみません。補足させていただきます。

まず、この25地点につきましては、防災対策の一環として、ここの圏内に住む方々の避難指示でありますとか、一時移転指示のためにこういったような設定をしています。ただ、一気に50基というのは難しいため、人口も勘案しなくてはございませんので、それぞれのまちの復興計画とかとあわせながら住民が非常に多い地点に今後、今年度と来年度をかけまして50基

ほどの測定器を置いて防災のために役立てていきます。

それから、今岩崎委員が言いました、じゃこの区間を超えた場合にはどうするんだというお話につきましては、実はこの福島の事故を受けまして、県内全ての市町村にモニタリングポストを設置させていただいております。全部で50基、この原子力発電所周辺の測定器も含めてでございますけれども、現在全ての市町村に最低1基ずつございまして50基ございますので、それらの数値から飛散の状況というのは広域的には把握することができるとは考えております。個々の集中的なポイントというのは詳細なサーベイ等をしないと把握はできないと思いますが、全体的に現在どのような広域的な影響があるのかというのはそういった数字から把握はできると思いますし、そうすればその周辺を非常に密度高く再測定をしたりして補足をしていくことができるのかなというふうに考えております。

今回、先生方にご相談をさせていただいているのは、女川原子力発電所の測定計画にかかわりまして、または非常時に際して例えばバックグラウンドをどのように把握しておくか、そのためにはどのような試料が最適なのか、どういう考え方に基づいてそういったデータを把握しておくのがいいのかというところをご相談させていただいているものですから、現在防災対策のところまでは申しわけございませんがご相談をさせていただく範疇とはさせていただいておりませんでした。ただ、今後、いろいろご質問もございましたように、この電子線量計の分布にいたしましても、防災対策として行うものではございますが、日ごろからのモニタリングのデータとかそういったものとの評価ということでもご相談させていただかなくちゃいけない部分は出てくると思いますので、データが出てきて皆様方とそういう意見交換を実施しながら、また県として必要な対策があればご助言をいただければというように考えて本日お示しさせていただいた次第です。

○真野委員 資料4の1ページの測定項目及び測定地点等の表なんですけれども、目的はバックグラウンドを知ることだということで、積算線量が大事だというお話だったと思うんですけれども、これを防災に兼ねさせようとした場合に積算線量の積分時間がもし長いとすると、余り避難のときの情報としてはちょっと遅れぎみになるのかなという感じがしたんですけれども、やっぱりバックグラウンドを知ることが一番の目的なんでしょうか。バックグラウンドをなぜ知るかという、やっぱり事故が起こったときにそのバックグラウンドを差し引いて事故による影響を知ることが究極の目的になるんじゃないかと思うんですけれども、積算というのはどのぐらいの時間で積算するんでしょうか。事故のときにはそれがどういうふうに役に立つんでしょうか。

○事務局 まず、積算の部分についてはセンターのほうから答えさせていただきますけれども、これらの測定器については、リアルタイムでの線量率もはかれるものでございます。ただ高線量のほうに割とシフトしているので、通常時のバックグラウンドをはかるにはそれほど精度としては、センターが今設置しているモニタリングステーションほどの精度はないというようなお話でございますので、いざというときには線量率としても計れますので、例えばこの付近が高いのでこうですと。日ごろから、逆に言えばバックグラウンドというのはそういうことで、線量率のほうももちろん計っていないとできないと考える。ただ、今回センターがご提案させていただいたのは、センターのほうではそれを積算線量計として使って、例えばその地域での住民の方々の積算線量率というのを把握するのにバックグラウンドとしてこういう調査をしたいということで、皆様方のご助言をいただきたいということで提案しているというように理解しています。そして、その積算線量率の範囲、幅につきましては、センターのほうからお答えさせていただきます。

○事務局 こちら積算線量としては1週間とか、1カ月、3カ月、1年という単位で任意にデータを集計できることになっています。それで先ほど課長も申しましたとおり、線量率としてのバックグラウンドレベルの精度は、モニタリングステーションほどの精度はないですけれども、積算線量から、年、月、日、時間で割れば、バックグラウンドの線量率も算出できると考えております。平常時としてはこのような運用を考えているというものであります。

○長谷川委員 質問の意味をよく理解していない。いざという緊急時に何分置きにデータを取り込めるのかと。それが先生の質問なんです。バックグラウンドはバックグラウンドで。

○事務局 こちらは普段から2分置きに測定していきまして、最短では2分通信というのができるようになっております。

○座長 ほかにございませんでしょうか。よろしいですか。

[なし]

○座長 それでは、ただいまいただきましたご助言等を踏まえましてUPZ圏内の平常値の把握のための調査を進めてまいりたいと思います。

ホ 平成27年12月4日の空間ガンマ線線量率の変動について

○座長 最後に、検討事項のホ、平成27年12月4日の空間ガンマ線線量率の変動について説明をお願いします。

〔検討事項ホにつき説明〕

- 座長 ただいまの説明につきまして、ご意見、ご質問がありましたらお願いいたします。
- 真野委員 どうしてこう高くなったと推定したのか、その辺をちょっと聞きたいなと思ったんですけども、これは原子力発電所の放出による異常値を検出する指標を出して、これが高くなったので原子力発電所から風上のところに当たる場所で何かがあったというふうに推定すればいいということなんですか。
- 事務局 この指標線量率に関しましては、機械的に設定値が決まっています、それを超えたらすぐにそれが人工核種の増加かどうかというのを確認するスクリーニング手段です。それで、人工放射性核種以外では指標線量率は上がらないという作り方ができるのが一番いいんですけども、実際はこういう天然核種しか落ちてこなくても、今申しあげましたとおり、どうしても想定しているモデルとのずれがあって、非常にまれではあるんですけども、線量率差し引きが若干ずれてその設定値を超えるということがあるというものであります。
- 真野委員 線量率自体も過去最高を記録するような非常に高い値が観測されていて、それは自然由来とは考えにくいということなんですか。
- 事務局 自然由来ではないおそれがあるということで、次にガンマ線スペクトルという、線量の上昇にはどんな放射性核種線が寄与しているかがわかるスペクトルを確認しました。福島事故でもともとセシウム137、134というのはある状況ですけども、事故の影響以外で上昇しているわけではないというのを確認したというものです。
- 事務局 すみません、追加で説明をさせていただきます。
- 線量率の動きを監視し、その線量率が原発の影響かどうかを調べるため、まずは降水とか感雨を確認しております。それから、ガンマ線のスペクトルから天然の放射性核種による影響というのを算出するプログラムがありますので、それを活用して天然の放射性核種による変動なのか、それ以外の変動なのかということスペクトルも確認しながら検討しております。上昇したときのスペクトルを見ると、天然核種であるビスマス214や鉛214といったラドンの娘核種のものだけが増えているということが確認できましたが、人工放射性核種由来の線量率を算出する指標線量率が上昇しているためその原因は何だろうと調べたことについてこの場をかりて説明をさせていただきました。
- 真野委員 結論がちょっとなかったのです。ちょっと。
- 事務局 追加で説明させていただきますと、こういった現象は東北電力の測定局でも観測されておりまして、原発自体で何かあったということについてはすぐに確認した上で、今お話しし

たような細かい詳細の確認を行うことで対応しているということでございます。

○長谷川委員 （ここは技術的な問題を扱う場なので、説明を省略されたのかもしれませんが）やっぱり基本的なことができていないんじゃないかなと心配になります。というのは、こういう異常な上昇があったときにまず何をすべきかといったら、指標線量率云々の議論なんかよりも前にスペクトルをまず見て、（女川原発由来か）そうかどうか調べる。東北電力に何かなかったかと確かめる。さらに近隣の線量率がどうかということも調べる、それが鉄則ですよ。日ごろ降雨などによって線量率が一時的にわずかながらたびたび上がって大変だから、指標線量率（詳細な調査を行うかどうかの目安）というある意味ではフィルターをかけているわけですよ。それを超えたときだけ調べようとしている。12月4日の線量率増加は、それにとらわれるような値じゃないんですよ、今回は、指標線量率云々よりもっと大きい値が出ているわけですよ。そうしたら、どうすべきか考えてなきやいけない。

○事務局 すみません。今お話ございましたとおり、その辺のところを最初に行った上で、今詳しく説明しました対応をしております。

○長谷川委員 いえいえ、それをまず最初に言うてからゆっくり説明していただきかったと思います。それを言わないで、指標線量率の話しをされると、（誤解されて）困っちゃうわけですよ。私が言いたいのはそこなんですよ。

いや、きちんとやっておられるとは思いますが。だけれども、ものには順序があって、こういったプレゼンテーションにも順序があると思います。

○梅田委員 上昇したのは天然の由来のもので、大陸から来た可能性が高いというお話ですが、数十年計測した最大値ということは、何十年に1回というような気象現象か何かが、大陸において、あるいは全球的なものかが、この12月4日か、その前の10日間、2週間ぐらい前に、何か起こっていたということになるのでしょうか。

○事務局 今回、例えば新潟県では普通は雪があるのに暖かくてほとんど雪がないというニュースも聞いておりますが具体的に何が起きたのかということまではまだ詰めていない状況です。

○事務局 この現象につきましては、先ほど12ページのところで他県での公表ということで3例ほど挙げておりますが頻度という面ではこれだけかどうかはわかりません。しかし、宮城県としては測定開始以来ということでしたが、全国的に見ればほかにも例もあるということでございます。

○梅田委員 今回の件は、先ほど11ページに示されているように、他県を含めて結構広い範囲でこういう上昇があったということです。それに対して、この12ページのほうは、ポイント

ポイントで過去にこれだけ上がったというお話ですから、ちょっと状況が違うのではないのかなという気がします。これが同じものかというか、同列に比較していいものなのか、今のお話だとちょっと疑問を感じます。どうなのでしょう。

○事務局 今回、こちら例を挙げたのは同じ天然核種で、上昇した例として、挙げたものです。確かにその線量が高くなるような核種を含んだ気団がどこから来るのかというのに関しましては、大陸側から来た例もあれば、本州内を回って高くなった例も挙げられています。海洋性の気団であればこんなに上がることはないんですけども、陸地を通るような気団であれば高くなることが知られていまして、気象の解析から大陸からの気団によってもたらされたものであろうと考えております。

○事務局 先ほどの12ページの岡山の例につきましては、今手元に当時の公表した文献がございますけれども、このときも大陸からの気団の移動があったということを詳細に確認しているということで、今回、宮城県での上がったものについても同じような状況ではないかと考えております。

○梅田委員 わかりました。では、そうすると、このときは宮城県では上がっていなかったけれども、頻度からすると数年か十年弱に一遍ぐらいは起こり得る現象であるということになるのですね。

○事務局 そのように考えております。

○梅田委員 わかりました。承りました。ありがとうございます。

○長谷川委員 今の10ページのところで、NaI検知器で高い値が出たところとして新潟がありますが、ほかのところは調べないんですか。あるいは、電離箱の値はどうなっているのか、何か情報はあるんでしょうか。

○事務局 そうですね。基本的に国で一括公表しているのはNaIが基本のもので、NaIのものを調べました。他に福島県や秋田県では雨が降っていないため除いて、これらの地域を選びました。

○長谷川委員 各県のホームページ見たのでしょうか。

○事務局 各県のホームページではなくて国で一括して全国の線量率というのを公表していますので、そのデータをもとに。

○長谷川委員 では、高いところは3カ所以外はないということでしょうか。

○事務局 はい。他に気象データから雨が降っている地域というのを選びました。若干上がっているところはありますけれども、特に高かったところを選びました。

○座長 ほかにございませんか。よろしいでしょうか。

[な し]

○座長 この12月4日の空間ガンマ線量率の上昇については、来月の技術会・協議会においてご報告をさせていただく予定となっております。その際には、まさに長谷川委員からご指摘があった通常の手順によって、まず女川原発で何かあったのかということを確認した上で、そこではなかったため原因は何なのかということ进行分析したということをご報告させていただきます。今回の内容については、技術会・協議会のほうで説明すると技術的なお話になりますので、本日はせっかく先生方一緒にいらっしゃいますので、技術的な分野について一緒にご説明をさせていただき、ご意見をいただきたいと、こういう趣旨で説明をさせていただきました。説明の手順が拙くて申しわけございませんでした。趣旨としてはそういうことでございました。また改めて技術会・協議会でご説明をさせていただきますので、またその際はよろしくお願ひしたいと思います。

これで本日の検討事項は全部終了いたしました。

本日も委員の皆様からいろいろご意見、ご助言をいただきまして、ありがとうございます。今後とも監視や調査を適切に進めてまいりたいと思います。

それでは、これで座長の職を解かせていただきます。

○司会 ありがとうございます。それでは、以上をもちまして、今年度第1回目の環境放射能監視検討会を終了といたします。